

● 編集後記

第7回日本医薬品情報学会総会・学術大会が6月19日、20日、「医薬品情報は保健・医療・福祉を担えるか」をメインテーマとして、日本薬学会長井記念館で開催されました。学会長山崎幹夫先生、大会長折井孝男先生、林昌洋先生はじめ実行委員の方々、本当にお疲れさまでした。

特別講演は国際基督教大学の村上陽一郎先生による「医薬品情報と安全学」でした。村上先生のように異分野の方からの話は時として我々、同じ様な発想にどっぷり浸かっている者にとって新鮮です。興味深かったのは、foolproofとその対極である零戦のお話でした。foolproofとは、「誰にでもできる」、「絶対安全な」との意味があります。先生はリスクの捉え方は人によりまちまちなので、専門家（零戦）だけでなく異領域の人の見方が必要と指摘されました。医療におけるリスク管理にも常に患者や素人の目が必要と言うことでしょう。

今日ではIT技術がfoolproofを支えていることは周知の事実ですが、ITが保証する範囲は全てについてのfail-safeではなく、想定したfoolをproofするにすぎません。我々はえてしてIT過信の安全信仰のpitfallに陥りがちです。

本号のテーマは「情報の電子化」です。医療情報、医薬品情報学の分野で今日、電子化は「安全」、「効率」、「公開性」、「同時性」において果たす役割は極めて大きくなっていますが、電子化された情報を扱う人間をfoolにしないような不断の努力が必要でしょう。今日の情報電子化に関わった世代は決して最初から電子漬けではなく、それまでの教育や経験から電子化の必要性を認識し、取り組んだ人々で、だからこそ電子化も生きているように思えます。6年制化が決定した薬剤師養成教育でも情報教育は否応なく入ってきますが、教育の場に身を置く者の一人としてこの事を今一度真剣に考えたいと思います。

(編集委員 太田隆文)